

新しい教育の知識を持ちましょう。

教師の力で子どもを変えられると思っている教師は尊大です。

子どもに対して、できる限りのことをしてあげる、その上でなおかつ教師の仕事の限界を知り、できないことがあると自覚している教師は、やはりプロとしての自覚が高いといえます。

水谷修先生といえば、いまや「夜回り先生」とすぐに出てくるようになりました。

5 / 4私の主宰している研究会「北の教育文化フェスティバル」には、GWのど真ん中、全国から300名の教師が集まってくださいました。

水谷先生は、3名の講師のうちのお一人でした。

カリスマ特有のおかしがたいオーラに包まれた方でした。

水谷先生は、自分がドラッグに深く関わるきっかけとなるマサフミ君のことを語りました。

マサフミ君は、シンナー中毒のあげく、幻覚により、トラックにつっこみ命を落としてしまった子どもでした。

水谷先生は、そのことをたいへん悔やみ、教師を辞めるつもりでいました。

しかし、その前にマサフミ君の死の原因になったシンナー中毒について教えてもらおうと、お医者さんのところへ行きます。

そのお医者さんは水谷先生にこういったそうです。

水谷先生、彼を殺したのは君だよ。いいかい、シンナーや覚醒剤は簡単にやめさせることができない。それは依存症という病気だからだ。あなたはその病気を愛の力で治そうとした。しかし、病気を愛や罰の力で治せますか？高熱で苦しむ生徒を、愛情込めて抱きしめたら熱が下がりますか？『おまえの根性がたるんでるからだ』と叱って、熱が下がりますか？病気を治すのは私たち医者の仕事です。無理をしましたね。

水谷修『夜回り先生』

さて、このような話をみなさんは遠い世界のお話のように感じるでしょうか？

私の担任している子どもたちに、ドラッグ中毒はいないから。

そう思われるでしょうか。

では、「シンナーや覚醒剤」を「鬱病や統合失調症」と置き換えてみてください。

これでは、いかがでしょうか。

「鬱病や統合失調症」の子どもを担任していないから。

とやはりお答えになるでしょうか。

では、「鬱病や統合失調症」はどのくらいの割合で、児童に発症するのでしょうか？

これについて正しくこたえられますでしょうか？

次のようなお医者さんの文章があります。

長いですが引用します。

子どものうつ病は決して稀ではない

近年、子どものうつ病が一般に認識されているよりもずっと多く存在するということが明らかになってきた。詳しくは後に述べるが、欧米の疫学研究をまとめると、一般人口における子どものうつ病の有病率は児童期では0.5～2.5%、思春期・青年期では2.0～8.0%であるという。すなわち、小学生で1～2クラスに1人、中学生・高校生では1クラスに1～4人にもものぼることになる。驚くべき数である。それだけでなく、最新の研究によれば、子どものうつ病は、従来考えられてきたほど楽観はできず、適切な治療が行われなければ、青年あるいは大人になって再発したり、他のさまざまな障害を合併したり、対人関係や社会生活における障害が持ち越されてしまう場合も少なくないと考えられるようになった。今や子どものうつ病をきちんと診断し、適切な治療と予防を行うことが急務となっているのである。

(中略)

わが国ではきちんとした疫学調査が行われていないので正確な数値は明らかではないが、実際には欧米の現状とそれほど大きな違いはないのではないかと筆者は考えている。しかし児童精神科医の間でさえ、そのことに対する認識は乏しいといわざるを得ない。これまでわが国では、子どものうつ病という現象は見逃されてきたといえるのではないだろうか。現在の日本では、子どもがうつ病に罹患しても、もちろん子ども自身は気づかず、両親や教師からもうつ病と認識されないのではないかと思う。さらには、心身の不調を訴えて小児科を受診しても、うつ病と診断されることは稀である。精神科を受診してもはたして適切に診断されるか疑問である。なぜなら、小児科医はうつ病を、精神科医は子どもをほとんど診たことがないからである。児童精神科医は少なく、児童精神科病棟も数えるほどしかないのがわが国の現状なのである。

傳田健三著『子どものうつ病 見逃されてきた重大な疾患』

教師は、ある意味子どもの命を預かっているといえます。

教師は、医師でもあるということを行った人がいました。

もちろん、高度な医学理論など知らなくてもいいのです。

しかし、子どもの病気のことくらいは、せめてうっすらとでも知識を持っているべきでしょう。

そして、教師として、愛情を持って子どもと接し、やれる努力をすべてします。しかし、必要とあれば、やはり専門機関への受診を考えるのが、プロの教師といえるのです。

なんでも教育の問題としてだけとらえると、取り返しのつかない結果を招くこともあるということでしょう。

特別支援教育に関しても同様なことがいえます。

きちんと指導できなければ、担任教師が悪いとすぐに決めつけたがる人がいますが、そうとばかりもいえない場合があるのです。

ですから、困ったら、どうぞ情報をオープンにしてみんなで取り組んでいきましょう。

記憶に新しいところでは、石狩市の少年がいじめていた子どもの母親を刺殺してしまった事件がありました。

裁判で、「発達上の問題があるにもかかわらず、それに周囲が気がつかなかったために起きてしまった」と指摘されました。

その限りにおいては、周囲の一人である教師にも責任があります。

もし、その教師が「障害」に関する知識をうっすらとでも持っていたら、この事件は起きなかったかもしれない。

本を読み、新しい教育や子どもの医学に関わる情報を頭に入れるのは、決して簡単なことではありませんが、教師として当たり前にしなくてはいけないことだと私は考えます。